

Take Actions for Rwanda



		阿部 彩 宮城県名取高等学校 教諭／英語	
教科	英語コミュニケーションⅠ・10時間、 総合的な学習の時間・1時間	対象	英語コミュニケーションⅠ：1年4, 5, 6組 (普通科40名)、総合的な学習の時間：1学年全 員(普通科240名、家政科40名、計280名)

I 実践の目的

大学生の頃に、1994年のルワンダ虐殺（ジェノサイド）を描いた『ホテル・ルワンダ』という映画を見た。忘れられないシーンがある。首都キガリにある高級ホテルの支配人・ポールと、イギリスから来た外国人ジャーナリストが会話をしている。虐殺の映像を世界に報道することで、ルワンダで起こっていることを知ってもらえば誰かが助けにきてくれる、と信じるポールに対して、外国人ジャーナリストはこう返答する。「誰も来ない。『かわいそうだ』と言うだけで、みんなそのままディナーを続けるんだ」。豊かな国で何不自由なく暮らす者と、そうでない者。先進国に住む者として、一日本人として、何かが問われている気がした。当時大学で英語コミュニケーションを専攻していた私は、英語を学ぶということはどういうことなのかを自問自答し続けた。ネイティブスピーカーのように会話ができるようになって、それから私はどうするのだろうか？その自問自答は、教員になってからも心のどこかで続いていた。英語科教員として、何を目標としていくのだろうか？英語というスキルを教えることがゴールであるなら、英会話教室の先生と何が違うのだろうか？

近年、私たちを取り巻く英語教育はここ10年ほどで大きく変容しつつある。淡々と日本語訳をこなしていく授業から、コミュニケーション能力の育成を重視した授業へと変化を遂げてきた。「技能統合型」、「英語で授業」、「小学校での外国語活動」…そのような進化と共によく謳われるのは「グローバル人材の育成」という言葉である。英語は、国際競争を勝ち抜くためのツールなのかもしれない。しかし、人材を育成することが教育の目標なのだろうか。

ヨーロッパ全体で外国語の学習者の習得状況を示す際に用いられるガイドラインである CEFR (Common European framework for reference for languages, Council of Europe, 2001) では、言語教育の目的が次のように示されている。“In an intercultural approach, it is a central objective of language education to promote the favourable development of the learners’ whole personality and sense of identity in response to the enriching experience of otherness in language and culture.” つまり、言語を学ぶことでもたらされるものは、言語と文化に見られる異質性に触れることによって、学習者の豊かな人格とアイデンティティの形成であるということだ。社会から強く求められている英語力が国際社会を生き抜くための上辺だけのスキルであっても、英語教育の本質は決して変わることがあってはならない。英語は、肌や目の色、国境や文化を越えて、ときには偏見や差別をも乗り越えて、人と人がつながっていくための言葉である。忘れかけていた英語教育の根本を、ルワンダを通して垣間見ることができた気がした。一日本人として、また一人の英語科教員として、自分にできることを見いだすことができた気がし

た。言語を通して文化を知り、歴史を学び、理解し合うこと。その手助けをするのが、私に与えられた大きな役割であることに気づかされた。

実践にあたり、以下のことをねらいとした。

- ①ルワンダのジェノサイドを知る。
- ②和解のプロセスを通して、赦しの難しさと必要性への理解を深める。
- ③ルワンダと日本のつながりを知り、支援の仕方を考える。

以上3つのねらいを通して、ルワンダへの関心を高めるとともに、行動を起こすことにつなげたいと考え、本実践のテーマを“Take Actions for Rwanda”とした。このテーマは授業で使用した6枚のワークシートすべてにタイトルとして提示した。

II 授業の構成

	学習内容	指導上の留意点
事前 授業	<ul style="list-style-type: none"> ・ アフリカのイメージ アフリカと聞いてイメージするものを書く ・ What is your important thing for you? 生徒自身の大切なものを紙に書いて、それを写真に撮る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○教科書本文に出てきたアフリカの話からイメージできることを書かせる。 ○大切なものを自由に書かせる。具体的なものでも、抽象的な概念でも、どちらでもかまわないことを伝える。
第1時	<p>「ルワンダの人々の暮らしを知る」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ フォトランゲージ 食べ物、市場、学校、水くみ、バイクタクシーなどの写真を見て、その写真がどのような状況であるかを自由に考えさせ、英語で説明させる。 ・ The difference of important things between Rwandan students and Japanese students 日本の生徒たちとルワンダの生徒たちの「大切なもの」には大きな相違があることを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○フォトランゲージは自由な発想を促すため、生徒からの質問には極力答えない。 ○それぞれの大切なものを、ランキング形式にして発表する。ルワンダの1位だけを空欄にしておき、1位が何であるかを思考させる。
第2～ 4時	<p>「ジェノサイドについて知る」【ねらい①】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 映画『ホテル・ルワンダ』を見る。 ・ パワーポイントを使って情報の整理を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ワークシートを与え、情報を探しながら映画を鑑賞させる。 ○適宜周囲と情報の共有をはかり、ジェノサイドへの理解を深める。
第5時	<p>「和解への道」【ねらい②】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ガチャチャのロールプレイ ・ ウムガニ・プロダクション (reading activity) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ロールプレイでは、「もし自分だったら…」という立場で考えさせる場面を設定する。

	学習内容	指導上の留意点
第6時	「支援のあり方を知る」【ねらい③】 ウムガニ・プロダクション (English reading activity)	○ reading activity では未習の単語やフレーズは新出の単語・熟語として扱う。
総合的な学習の時間	「ルワンダを知る」【ねらい③】 1 学年集会 ミニ講演会 講演タイトル [ルワンダから見た世界と日本]	○初めてルワンダの話聞く生徒も多いため、写真などを使用しながら興味・関心を引きつける。 ○ジェノサイドだけではなく、現在のルワンダの状況なども話し、「アクション」に結びつけるためのきっかけをつくる。
第7・8時	「Take Actions for Rwanda」【ねらい③】 高校生としてルワンダに住む人たちへ何かできることはないか考える。ポスターセッション用のポスターを作製する。	○支援の例を提示する。
第9時	「Take Actions for Rwanda ～ルワンダの今、未来に向けて～」【ねらい③】 ・これまでの振り返り ・生徒たちによる発表 ・ゲストティーチャー 在日ルワンダ人 ジョバンニ・ンダブゴバ氏による発表	○パワーポイント、フォトランゲージで使用した写真などを用いて、これまでの振り返りを行う。 ○ジョバンニ氏には、ジェノサイド時の自身の経験、現在のルワンダ、食文化などについて話してもらう。

III 授業の詳細

●事前授業 「アフリカのイメージ」 「What is your important thing?」

ルワンダ行きが決まったころ、教科書 (MY WAY English Communication I [三省堂]) でアフリカの話を読んでいた。本文の内容は、マラソンランナーの高橋尚子さんが、ケニアの子どもたちに中古の靴をプレゼントするというボランティア活動に携わった話だ。Optional readingとして出てきた文には、コンゴ、ガーナ、エチオピア、セーシェルなどの様々なアフリカの国が登場し、そこで採れた鉱物や農産物が私たちの生活に大きく関わっている、という内容のことが書かれていた。アフリカの地図を見ながら教科書に出てきた国名を確認し、“Actually, I will go to Africa during summer vacation.” と言うと、生徒が驚いた様子で反応するのがよくわかった。教科書で出てきた言葉や国名に、突然意味合いが出てきたように感じられたのだろう。“I will go to Rwanda. Where is Rwanda? Can you find?” と言い、手元の地図でルワンダを探させるがなかなか見つけれない。ケニアやエチオピアに比べると非常に小さな国なので、見つけるのはそう簡単ではないだろう。「小さい」「見えない」と様々な感想が飛び交った。

そこからアフリカのイメージを日本語で挙げさせた。教科書に出てきた情報を書いてきた生徒もいれば、全く異なる生徒もいた。その多くは「貧困」「発展途上国」「靴を履いていない」「エボラ」といったマイナスのイメージばかりだった。教科書の内容は決して暗いテーマではなかつ

たにもかかわらず、いいイメージを持たせることができなかつたことが、何より残念でならなかつた。

そのアフリカのテーマを書かせている間に、もうひとつ同時進行で行つたことがある。A4判の紙を配布し、英語で自分の大切なものを書いて写真をとつた。それをルワンダの学校で子どもたちに見せたいと伝えたところ、生徒たちはとても意欲的に取り組んだ。「大切なもの」を通して、ルワンダの子どもたちと想いを共有できたらと考えて行つたのだが、これはその後の授業において、「ジェノサイド」を引き出すための重要な位置づけになつた。

< Important things of Japanese students >



第1時 「フォトランゲージ」 「The difference of important things between Rwandan students and Japanese students」

☺

帰国して一か月ほどが経ち、いつからルワンダの授業に入るか悩んでいた。できることなら教科書の内容から自然に入りたいて考えていたが、ケニアの話以降、どうもルワンダとは遠ざかっていたからだ。そこで事前研修のときに学んだフォトランゲージという手法を思い出した。そのとき教科書では、ある有名なアメリカ人写真家が撮つた作品のおもしろさについて語られている話を扱っていた。写真を見てその作品について描写したり、そのおもしろさについて説明するというのをちょうど行っていたので、フォトランゲージを切り口にルワンダの話に入っていくことに決めた。

ルワンダで撮つた写真を10枚ほどA3判に印刷し、グループ（3～4名）に一枚ずつ配布した。写真についての一切の説明を与えず、想像だけでその写真について英語で描写をさせた。グループ内で出た単語や文章を発表させ、全体でその写真を共有した。

< フォトランゲージに使用した写真と生徒が作った文の例 >



They bring banana by bike.

They look very heavy.

Looks hot.



They go to the mountain by bike.
 Aya-sensei and a man ride a bike.
 You must not do it in Japan.
 (↑ Actually, this is a taxi と言うと驚きの声
 上がる)

<フォトランゲージに取り組む様子>



フォトランゲージを行った後、夏休み前に「大切なもの」の写真を撮ったことについて触れ、ルワンダの小学校でも同じことを行ってきたことを生徒たちに伝える。ルワンダと日本の生徒が書いたそれぞれの大切なものを1位から3位のランキング形式で説明をした。その際、ルワンダの1位を空欄にしておき、何だと思うか生徒に尋ねる。水汲みの写真を見たばかりなので、“water”という声が多く上がる。自転車にバナナをいっぱいに乗せた写真を見たので、“banana”と誰かが言うと教室中に笑いが起こる。だが、なかなか正解は出ない。“OK, the answer is…”と言い、黒板に peace と書く。「へー！」と感嘆の声が聞こえた。生徒がルワンダに対して興味が湧きはじめている手応えを感じた。

第2～4時 映画「ホテル・ルワンダ」(Appendix 1)

多くの民族紛争の原因は、宗教的対立、言語や文化の違いなどから生まれると言われている。ところがルワンダのそれはこの構図に当てはまらない。フツ族、ツチ族は昔から同じ言語や文化を共有し、同じ宗教を信仰してきた。元々は階級名であった名称がいつしか民族名へと変化し、ベルギー統治下時代に民族名が記載された身分証明書が発行されたことが事件の引き金になっている。軍隊を介さない、国民の手による虐殺は極めて原始的に行われたが、そのスピードたるや並大抵のものではなかった。ナチスのホロコーストを上回るほどの驚異的な速さで虐殺は行われ、広島・長崎の原爆投下以降、最も効率的な殺人だったとも言われている。それを可能にしたものは憎しみでも対立でもなく、扇動であった。貧しく無学なルワンダの農民たちは、疑うことなくとも簡単に殺人に加担していった。天然資源の持たないルワンダに国際的な価値は無いも同然

で、世界はルワンダで起こっていることに目を背け続けた。100日間で80～100万人が亡くなったと言われているジェノサイドは、豊かな国で生まれ育った高校一年生にとってはあまりに重いテーマだったかもしれない。しかし目を背けてはいけない過去と、無関心という形で間接的に殺人に加担していた先進国に住む者として、ここは決して避けては通れないと考えた。

この映画を見るにあたって、ジェノサイドに関する事前説明は一切行わなかった。説明がなければ難しい内容かもしれないが、関心を持って見てもらうためには、生徒自身が情報を集め、それを共有することで、DVD鑑賞をできる限り能動的な活動に近づける必要があったからだ。また、ショッキングなシーンは無理に見る必要がないこと、気分が悪くなったらすぐに知らせしてほしいことを伝え、生徒にトラウマ的感情を植え付けられないよう留意した。

第5時「ガチャチャのロールプレイング」(Appendix 2)

ルワンダはジェノサイド後、両民族の和解を最大のテーマとしていた。その和解政策のひとつとして行われた村レベルの裁判「ガチャチャ」では、約82万人の加害者が処罰されたと言われている。裁判では加害者、被害者がそれぞれの証言を語ったとされており、ガチャチャは10年もの間行われ続けた。ガチャチャでの証言を通して、当時のルワンダを生き抜いた人々の心情に触れ、相互理解について考えを深めさせた。映画や明示的な説明からだけではくみ取ることのできない人々の心情について考えさせることができたのではないかと思う。

<ガチャチャの感想>

- ・映画を見ただけでは、「フツ族が悪い」としか捉えることができませんでした。もちろん人を殺すことは何があっても絶対にしてはいけないことだけど、フツ族とツチ族の両方の視点から考えることができました。
- ・フツ族の人はツチ族を殺すことに面白さなどを得ていたのだと思っていましたが、そんなことはなく、仕方がなかったという人や、心を失っている人の話が聞けて、あのラジオさえなければ互いにうまくやっていたのだろうと感じました。
- ・どうしてあんなことが起こったのか、私には本当にわからないし、過去のことだからもちろん止めることもできない。何も悪くない人が殺される、何もわからないまま人を殺す人がいる。そんな恐怖でしかない状況を生きた人がいることを、私たちは絶対忘れてはいけないと思います。この授業でやらなかったら知らなかったことかもしれないと思うと、それも怖くなりました。

第6時「ウムガニ・プロダクション」(Appendix 3)

ルワンダにはウムガニと呼ばれる昔話がいくつも存在している。火を囲みながら大人から子どもへと代々受け継がれてきたウムガニは、社会のルールを子どもたちに教えるための重要な教育的ツールであった。代々受け継がれる物語だけではなく、時に語り部は自身の経験に基づいてウムガニを作り、子どもたちに語って聞かせたとされている。ルワンダの人々の豊富な人生経験と深い愛情に溢れた昔話なのである。

キガリで立ち寄った本屋で、このウムガニの本をたまたま手に取った。美しい色のギテンゲ(ルワンダの伝統的な布)に覆われた、小さな薄い手作りの本。帯にはこう書かれていた。“We

had no choice but prostitution since we lost parents in Genocide. But now we have hope to leave this work, return to school, give an education to children, buy foods and medicine by making this book. Thanks for purchasing! (ジェノサイドで両親を亡くし、私たちは売春する以外〔生きていくための〕選択肢はありませんでした。しかし今、この本を作ることによって売春の仕事をやめ、学校に戻り、子どもたちに教育を与え、食べ物や薬を買うという希望を持つことができます。購入してくれてありがとうございます!)” この言葉に一瞬にして心を奪われ、その場で数冊購入し、帰国後にこの本について調べてみた。すると驚くことに、青年海外協力隊としてルワンダで活動していた日本人女性が、この本の作成プロジェクト(通称『ウムガニ・プロダクション』)に関わっているということがわかった。この本を、そして『ウムガニ・プロダクション』を英語のリーディング教材として使用することで、支援の在り方について生徒の理解を深めさせたいと考えた。

総合的な学習の時間 ミニ講演会「ルワンダから見た世界と日本」

公開授業の直前、学年集会で25分間講演会をする時間を設けてもらった。この講演でルワンダのことを初めて知る生徒も多い。かたや6時間以上かけてルワンダのことをしっかりと学んできた生徒もいる。25分間、双方に飽きさせない話をするためには、ジェノサイドに触れながらも別の視点からルワンダを見る必要があった。水の大切さ、ルワンダで働く日本人、人を赦すということ…様々な視点があったが、ここでは「本当の豊かさとは何か」という視点で話をした。あまり知られていない事実だが、日本は東日本大震災の際、ルワンダ政府から10万ドルの支援をいただいている。10万ドルあれば、井戸や水道をいくつ作ることができただろう。電気の通っていない村に電線を引くこともできたかもしれない。急激な経済背長を遂げたとはいえ、すべての国民が十分な生活を送っているわけではない。21年前のジェノサイド時、ルワンダに手を差し伸べることのなかった日本に対して多大な支援をしてくれたルワンダ。本当に豊かなのはどちらなのか、お金や物に恵まれていることだけが豊かさと言えるだろうか。照明を落とした薄暗い体育館の中でも、生徒たちの表情が一気に変化するのが見えた。これまでルワンダのことを勉強してきた生徒たちはもちろん、初めて聞く生徒たちにとっても、この講演が「行動」を起こすきっかけ、つまり第7・8時に向けての伏線となったことを期待したい。

第7・8時「Take Actions for Rwanda」

具体的なルワンダへの支援をして、アイデア作りとポスター創りをグループワークとして取り入れた。生徒から出た案としては以下のようなものがある。

- ・ウムガニの日本語版を作って、製本して売る。その売り上げを寄付する。
- ・ルワンダに関するポスターやチラシを作って募金を呼びかける。
- ・「ホテル・ルワンダ」の上映会を行って、募金を呼びかける。
- ・書き損じハガキを集めて、「ムリンディ・ジャパンワン・ラブ」というルワンダ支援を行っている現地 NGO に送る。
- ・マリールイズさんを学校に呼んで、講演会を開く。
- ・彩先生が買ってきたギテンゲを使用して、しおりを作って売る。その売り上げを寄付する。

「Take Actions for Rwanda ～ルワンダの今、そして未来に向けて～」(公開授業)

段階	学習活動と主な発問 (●予想される生徒の反応)	形態	指導上の留意点
導入 (15)	1. Review & Introduction キニアルワンダ語で挨拶をする ジョバンニ氏の紹介をする これまでの活動を振り返る (スライド、掲示物) ウムガニ・プロダクションを振り返る	一斉	○生徒の発言を促す
展開 (30)	2. Students' presentation ルワンダへの支援の仕方をグループで発表する。 (いつ、どこで、どうやって、何をするのか) 聞いている生徒は、聞き取った情報をワークシートに記入し、情報の共有をはかる。また、評価も行う。	グループ 一斉	○発表がひとつ終わる度に、情報の共有をする時間、評価を書きこむ時間を1～2分ほど取る。
	3. Jovani's presentation ジョバンニ氏による発表 ①自身のジェノサイド時の経験 ②ルワンダの今 ③ルワンダの文化 ④日本との共通点 ⑤動画 (遺骨を掘り起こし、丁寧に洗ってジェノサイド・メモリアルへ届ける様子) ●生徒からの質問があれば受け付ける	一斉	○ポイントをメモしながら聞く。 ○聞き取ったことをグループ内で共有し合う。
まとめ (5)	4. まとめ 感想記入	一斉	○感想を記入する

<公開授業の様子>



ポスターセッションの様子



ジョバンニ氏の経験談を聞く生徒たち

IV 実践の成果

公開授業を目前に控えた12月の初旬、ルワンダの授業が10時間目に入ろうとしていたことに気づいた。この頃になると、教室に入るたびに生徒たちから「先生、今日はルワンダですか？」と聞かれることが多くなった。また、教科書を用いた通常の授業において、グループワークでチームの名前を決めさせたとき、「RWANDA」と書いてきた生徒たちもいた。映画『ルワンダの涙』を見た、と教えてくれた生徒もいた。また、ルワンダの隣国、ブルンジの現在の情勢（フツとツチの対立は今もなお続いている）について調べて教えてくれた生徒もいた。ルワンダという小さな国が、生徒たちの心に大きな火を灯したことを確信した。授業のテーマは終始一貫してジェノサイド。あまりに重いテーマ、あまりに遠い国の出来事で、生徒たちは果たして向き合ってくれるかという不安があったが、それは結局のところ杞憂であり、生徒の感想から理解の深まりや変化が見て取れたこともまた大きな成果であった。

<生徒の感想>

- ・ルワンダのことを知って、ルワンダのために私たちができることがあるなら是非やりたいと強く思うようになりました。その一歩として、班で考えた案を完璧にこなしたいです。また、その活動が終了した後も、ルワンダはもちろん、他の貧困国のためにできる活動にも積極的に参加したいです。ルワンダはどの国にも負けにくいらい他国思いの優しい国だと思います。募金やフェアトレードを通して、もっとルワンダと日本を仲の良い国にしていきたいと思いました。
- ・最初は、ルワンダはとても不幸なところで、それに対して自分たちは恵まれているのだと思った。だがよく知ってみるとルワンダの人たちはつらい経験をしているが、お互いに助け合い、協力しながら生活していることを知り、決して不幸ではないのだと思った。大震災の被害で日本が大変な状況にあった時、ルワンダの人たちが大金を寄付してくれたと知ったとき、涙が出そうになった。その大金があれば身の回りのものを整えられるし、食べ物や電気にも困らないだろう。だがそれよりも優先して日本に寄付してくれたのであれば、今度は私たちがルワンダにお返しするべきなのだと思っただけでなく、このことを知っている人は少ないだろうし、私も先生から聞いて初めて知ったので、まずはこの事実を沢山の人に知ってほしいと思った。そして、お金で物を買って不自由のない生活をするだけで人の幸せではないと実感したことも、沢山の人たちに伝えたいと思った。今回ルワンダのことを詳しく知ることができ、自分の人生の考え方が変わったと思う。
- ・歴史で学ぶ戦争は数百年も前のことだったりして、ただ機械的に頭の中に入れていましたが、ルワンダで起きたことはつい最近のもので、ずっと昔の戦争の話聞くより心が痛みました。ジェノサイドを乗り越えて幾分か平和になったであろうルワンダがまだ貧しい国であり、数え切れないほどの人たちが十分な生活を送れない中で、4年前の震災のときに大金を日本に送ってくださったその優しさと、ガチャチャで事件のことを乗り越えようとする意思の強さに感銘を受けました。
- ・「ホテル・ルワンダ」を見た後に、家でルワンダのジェノサイドについて調べてみて、とても興味を持った。もう一度その映画を見てみたいと思った。将来、彩先生みたいに私もルワンダへ行って、この目で今のルワンダを見てみたくなった。

V 課題

(9) ①重いテーマを重いままで終わらせないためには、それ相応の時間が必要になること、②教科書との進度の兼ね合い、の2点は大きな課題である。他教科の先生方とタッグを組み、教科の特性を生かしながら授業ができればさらにより良いものになったのではないだろうか。国際理解教育は、仲間作りも大きな課題だということを痛感した。また、今回はジェノサイドのみに終始したが、ルワンダは様々な切り口からの授業展開が可能だということを他の先生方の授業実践を通して知ることができた。今後は水やコーヒーなどをテーマに、別の視点からのルワンダを、そして世界を生徒に見せたい。また今回の研修を通して得た仲間たちとともに、異校種間で授業ができればより視点が広がるのではないかと感じた。

関連する学習指導要領の内容と文言

高等学校学習指導要領 外国語

第2節 外国語科の目標

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーション能力を図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。

外国科の目標は、コミュニケーション能力を養うことであり、次の三つの柱から成り立っている。

- ①外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深めること。
- ②外国語を通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること。
- ③外国語を通じて、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を養うこと。

●出典・参考図書

- ・ Council of Europe (2001). Common European framework for reference for languages: Learning, teaching, assessment. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

Appendix 1

Take Actions for Rwanda No. 2

Class No. Name

★Watch a movie – “Hotel Rwanda”

1 基本情報

ルワンダの首都は？ () この映画はいつの話？ ()
 映画に出てくる2つの民族名は何？ () 族 () 族
 主人公 ポール・ルセサバギナの情報 (職場、家族構成、民族名・・・気づいたことを何でも)

2 ポールが不安に思いながら家に帰ると、妻のタチアナがあるニュースを口にします。それは何？

3 ↑の翌日の朝、ラジオを聞くと驚くようなことが流れています。それはどんな内容？

4 「映像を見た誰かが助けに来てくれる」と言ったポールに対して、外国人ジャーナリストが言ったことは何？

5 ホテルのバーでスコッチを飲みながら、大佐がポールに伝えたことは何？

6 国連軍がいなくなったあと、ホテルには何人の人が取り残されていた？

7 米務省は、ルワンダで起こっていることを何と表現した？

8 水をとめられたホテルでは、人々はどのようにして生活用水を得ていた？

<感想>

Appendix 2

ガチャチャのロールプレイング<一部抜粋>

フツの加害者・男性

刺激的な毎日だった。何人殺したか数えることさえしなかった。終わったと思ってもまた始まるとわかっていたので、行動の最中も、終わってからも、数えなかった。本当に、何人殺したかわからないんだ。そんな風にして忘れてしまった。市場で殺した男に関しては、正確に覚えている。最初の殺人だったからだ。他の人に関しては曖昧だ。記憶にない。殺したときには、重大なことだなんて思ってもいなかった。自分を殺人鬼に変えた小さな事に気づいてさえいなかったのだ。

ツチの生存者・男性

私は目の前で兄弟が殺され、家には火を放たれました。私の友人は近くの教会に逃げ込みましたが、教会でも虐殺は行われていました。ツチは神にも見放されたのです…。殺人者が教会でひざまづいて神に祈り、我々に自責の念を示さなければ、私は殺人者と共に祈ることはできません。本当の懺悔は神の像に向かってではなく、懺悔したい相手の目を見てなされるものです。しかし今のところ、殺人者たちとの和解は私の関心事ではありません。

ツチの生存者・女性

私の名前はフランシーネです。時々、ベランダの椅子に一人腰掛けていると、こんなことを想像するんです。ある遠い日、地元のある男性がゆっくりと私に近づいてきて言うのです。『こんにちは、フランシーネさん。私はあなたと話すために来ました。私はあなたのお母さんを切り殺した者です。でも、あなたに赦してもらいたいのです。』と。そんな人に私は何も答えることが出来ません。これから生き続けていくためには、また普通の暮らしに戻らなくてはなりません。私たちは隣同士の会話をしながら、お互い作物を作るために、再び一緒に水を引いたりして協力しなければならないのです。おそらく20年後、50年後、子どもたちは教科書でしかジェノサイドを学ぶことはできないでしょう。でも、私たちが赦すことなど絶対にあり得ないのです。

ツチの生存者・男性

私には、あれだけ平気で人を殺していたフツたち全員が、心の底から誠実になれるなんて考えられません。たとえ彼らが神の赦しを請うたとしても、彼らにとって、ツチは常に敵であり続けることでしょう。でも、私自身には赦す用意ができています。それは彼らが行った残虐行為を否定することとは違います。ツチを裏切ろうというわけでもありません。私は彼らがなぜ自分を切り裂こうとしたのかを、これからずっと問い続けて苦しみたくないのです。だから私は赦すのです。とても難しいことだと思います。ツチであるがゆえの自責の念や恐怖の中に生きていたくはないのです。彼らを赦さなかったら、私だけが一人で苦しみ、いらいらし、眠れないことになってしまうような気がするのです。

<出典>

ジャン・ハッツフェルド(2014)『隣人が殺人者になる時 加害者編:ルワンダジェノサイドの証言』

西京高校インターアクトクラブ(服部欧右)訳, かもがわ出版

ジャン・ハッツフェルド(2015)『隣人が殺人者になる時 和解への道:ルワンダジェノサイドの証言』

西京高校インターアクトクラブ(服部欧右)訳, かもがわ出版

Appendix 3

Take Actions for Rwanda No. 5 < Reading activity >

class No. Name

Umugani Production

“When did you start 1prostitution?” “When I was sixteen.”

“Why?” “To live. I lost my parents because of the 2genocide in 1994.”

“Are you infected with HIV?” “Yes.”

“Do you have any children?” “Yes, I have three children. Two of them are also infected with HIV.”

“Do you like this work?” “No.”

This is Rwanda. People call this country “the land of a thousand 3hills”, or “the land of eternal spring”. You can see a lot of beautiful hills here. The climate is very calm, it’s always like spring. People are also nice, and they are always smiling at you.

In 1994, a genocide happened in Rwanda. It started on 7th April, and finished on 15th July in 1994. About 800,000 to 1,000,000 Tutsi were killed for about 100 days. 4Priests, police officers, even teachers killed Tutsi. They used 5machetes to kill people- they are used to cut bananas, grass and so on. A lot of Tutsi were killed by Hutu, not only men, but also women, girls, children and babies. After the genocide, it was so hard to live, especially for women. Some of them had to become prostitute.

18 years later, in 2012, a Japanese woman arrived at Rwanda. Her name is Yuko. She wanted to save Rwandan women who had to prostitute themselves. She visited many villages to see a lot of women, and interviewed them. Most of women wanted to 6quit prostitution for their family, kids, and themselves.

Yuko 7suggested an idea to them; that making and selling books in order to make money. Rwanda has nice old stories which tell of the wisdom in life. They are called *Umugani* (it means “old stories” in Kinyarwanda), and it was passed on by word of mouth from generation to generation. A long time ago, when night comes, people began to tell these stories in a circle around a fire. Stories about people, nature, animals and the God... *Umugani* has many kinds of stories.

Making and selling *Umugani* was a success. A lot of women could leave prostitution because they could make money by selling books. The whole process of making the books is 8handcrafted, and uses handmade paper from banana fiber. On this book, you can read the following sentences:

“We have no choice but prostitution since we lost parents in the genocide. But now, we have hope to leave this work, return to school, give an education to children, buy foods and medicine by making this book. Thanks for purchasing! “